

## 測量器具商としての大隅源助

大 谷 典 久

- I. はじめに
- II. 大隅源助の系譜
- III. 大隅源助の店の変遷
  - (1) 江戸期の大隅
  - (2) 明治期の大隅
  - (3) 大隅源助と大墨但馬大掾
- IV. 不動産所有から見える大隅
- V. 大隅による測量器具製造販売
  - (1) 大隅と市川方静
  - (2) 大隅の測量器具製造
- VI. おわりに

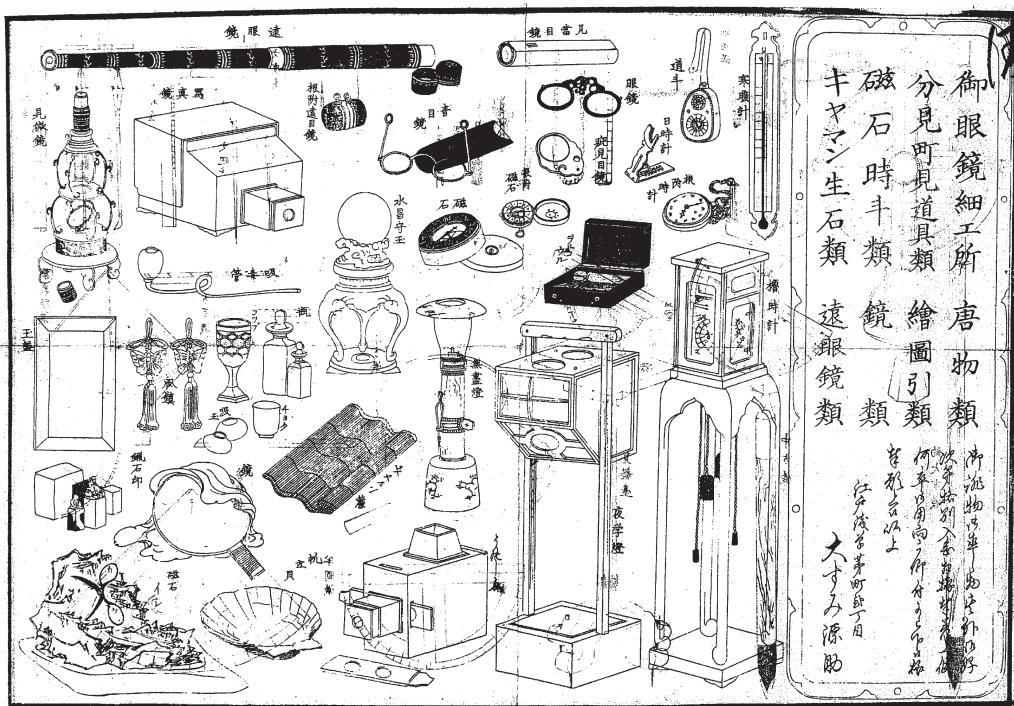
### I. はじめに

江戸時代後期、全国各地に測量術が広がり、測量家を輩出していく中で、様々な測量器具（製図器具を含む。以下同じ。）も普及することになる。こうした測量器具の製造や販売に携わった人々も少なからずいたであろう。当時の測量器具の製造者や販売者については、大谷亮吉が、全国測量を行なった伊能忠敬によって使用された測量器具の製造者として江戸や京都の人物を挙げている<sup>1)</sup>。また片山三平は、測量器具とその製造・販売者の変遷をたどる中で、伊能忠敬が使用した測量器具の製造者やそれ以外の江戸における製造・販売者も挙げ、地方の製造者についても言及している<sup>2)</sup>。さらに、江戸時代の測量術について論じる松崎利雄や、明治期の地租改

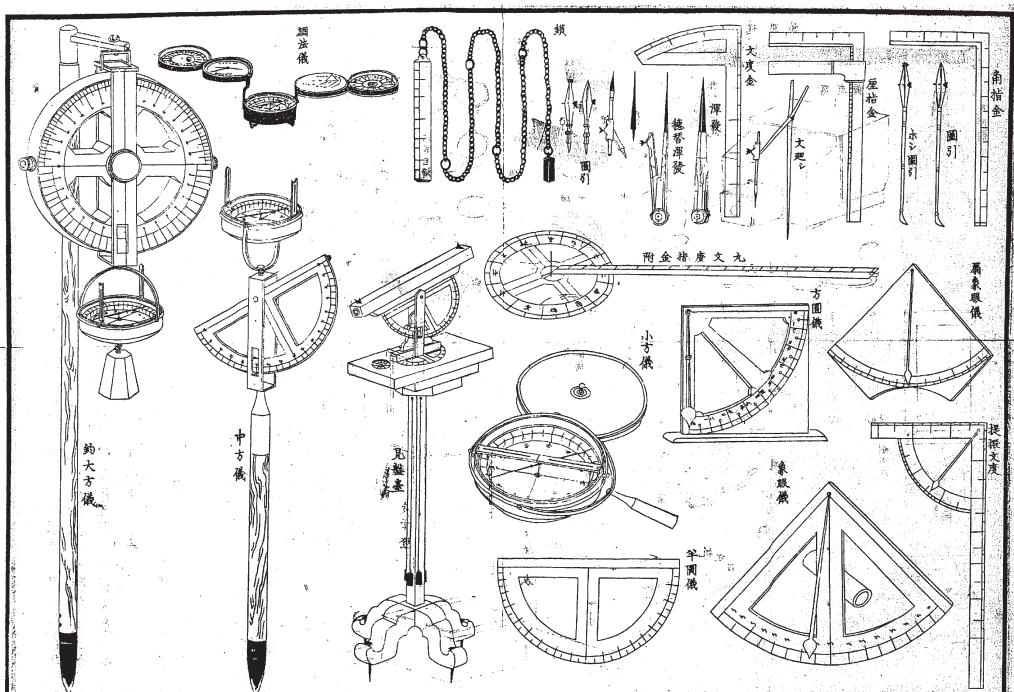
正作業使用の測量器具について触れる佐藤甚次郎は、江戸・京都・大阪における測量器具製造・販売者を挙げている<sup>3)</sup>。このように、江戸時代後期には、測量器具の製造・販売者が都市部を中心に存在していたことがわかる。

江戸においては、測量器具製造者として大野弥五郎規貞・弥三郎規行・弥三郎規周の大野家三代、大野家製造の測量器具を販売していた玉屋吉次郎などが、代表的な人々として挙げられる。彼らは、測量や地図作成を行なう者に必須な道具類を供給していたわけであり、測量史や地図史の中で重要な側面を担っていたことは言うまでもないだろう。しかしながら、こうした人々については、これまで簡単に触れられることが多く、その実態はほとんど明らかにされていない。詳述したものとしては、大野弥三郎規周について、幕末オランダ留学以降を中心に述べた事例<sup>4)</sup>が目に付く程度である。

本稿では、今までほとんど明らかにされてこなかった江戸における測量器具製造・販売者のひとりとして、江戸浅草茅町二丁目に店を構えていた大隅源助を取り上げることにする。江戸時代後期から明治時代初期にかけて使用された測量器具がどのようなものであったのかを理解する上で、大隅源助の出した引札が紹介されることが多い<sup>5)</sup>。図1は、大隅が出した両面刷の引札である。引札の表



〈表〉



〈裏〉

図1 大隅源助の引札（両面刷）

國立天文台藏。

面には、時計・眼鏡・灯火具・オルゴール・写真鏡・ガラス製品など、裏面には数多くの測量器具が図示されており、大隅が様々な商品を取り扱う中で、測量器具がかなり含まれていたことがわかる。大隅の引札には、測量器具が具体的に図で示されており、当時、使用していた測量器具の形状がよくわかると共に、多様な測量器具が普及していたことも示している。

大隅源助については、拙稿<sup>6)</sup>の中でその足跡について述べたことがあるが、主題を大隅に置いたものではなかったので充分に述べることはできなかった。本稿では、大隅源助に焦点を当て、その後、新たに明らかになった点も含めて検証していくことにする。

## II. 大隅源助の系譜

大隅源助の墓は、東京都台東区清川の光熙院にある。『蓮門精舎旧詞』によると、光熙院は浄土宗寺院として、松屋上人によって正保3年(1646)に起立され、慶安3年(1650)に浅草新鳥越(現在の清川)に移ったという<sup>7)</sup>。

光熙院には、大隅源助ゆかりの墓碑が三基並んで建っている。三基の墓碑は同じ形状をしており、正面には家紋である「抱き茗荷」の下に「先祖代々」、台石に「野村」と大きく刻まれている。大隅は屋号であり、本姓は野村という。屋号の大隅は「大墨」、「大すみ」と表記されることもある。さらに墓碑の裏面には、それぞれ次のように刻まれている。

- (右) 明治廿一年八月  
日本橋通貳町目壹番地墓
- (中央) 明治廿一年八月  
[ ] 二丁目六番地墓
- (左) 明治 [ ]  
淺 [ ] 貳番地墓
- ※ [ ] 内は欠落部分。

このように三基の墓碑には、建立年月と墓を

所有する家の所在地と考えられる文字が刻まれている。

中央の墓碑が大隅源助の墓であり、左右が分家の墓である。右側の墓碑については、日本橋通二丁目一番地に親族の野村長之助という人物が店を持っていたことから同家の墓と考えられる。中央と左側の墓碑には、文字の欠落が見られる。中央の墓碑については、大隅源助が浅草茅町二丁目六番地に店を構えていたことから「[淺草茅町] 二丁目六番地墓」と刻まれていたと考えられる。左側の墓碑については、当時、浅草御蔵前片町二番地に野村家の土地があり、親族が住んでいたことなどから「淺[草御蔵前片町] 貳番地墓」と刻まれていたと思われる。また、左側の墓碑の年月は欠落しているが、三基とも同じ特徴を示していることから、同時期に建てられたと考えられ、明治21年(1888)8月に三家の墓として建立されたものであろう。

大隅源助の子孫である野村家と菩提寺である光熙院には、野村家の系譜をたどることのできる史料が残されている<sup>8)</sup>。こうした史料によると、大隅源助を名乗る者が、浅草茅町において四代続いており、大隅源助という名称は、商人名そして店名として代々継承されていたことがわかる<sup>9)</sup>。初代から四代目までの生没年月日・享年などは次のとおりである。なお、二・三・四代については、他の史料によって補っている点がある<sup>10)</sup>。

### ◎源助

- 初代 嘉永7年(1854)8月5日没  
享年58歳
- 二代 隠居名、玉志  
文政7年(1824)5月24日生  
明治29年11月19日没  
享年73歳
- 三代 文久元年(1861)1月10日生  
明治21年1月21日没  
享年28歳

四代 俗名、時之助  
明治18年7月生  
昭和20年9月15日没  
享年60歳

また、初代源助の前に田所町において源左衛門を名乗る者が二代続いていたことがわかる。田所町とは、日本橋田所町であると思われる。

◎源左衛門  
初代 寛政8年(1796)5月22日没  
享年61歳  
二代 文政5年(1822)1月22日没  
享年52歳

光照院の史料によると、初代源左衛門は「大工 源左衛門」<sup>11)</sup>となっていることから、大工職人であったことがわかる。しかし、どのような大工の職人であったのか、あるいはその後に続く、二代源左衛門、初代大隅源助へと、その技術が受け継がれていったのかは不明である。

『明治十年内国勧業博覧会出品解説』によると、大隅源助の店は、寛政9年(1797)3月の開業であるという<sup>12)</sup>。その時期は、二代目源左衛門の代になるが、また、初代源助が生まれた頃にもあたっている。

明治10年の『浄土宗明細簿』には、光照院の檀家惣代のひとりとして野村源助の名がある<sup>13)</sup>。また、光照院の無縁墓に残されている昭和3年(1928)の年号が入る碑には、檀家惣代のひとりとして「四代目 野村源助」と陽刻されており、大隅の当主は代々、光照院の檀家惣代を務めていたようである。

野村家の祖先の出身地について、子孫のひとりである野村千春氏に伺ったところによると、いつのことかはわからないが、祖先は尾張・伊勢方面の「オオノ」という地から江戸に出てきたといい、それは「ヨッカイチ」の

近くであったという。「ヨッカイチ」を伊勢国「四日市」とすると、近くには「大野」と呼ばれる地域(現在の鈴鹿市)があり、この地を指すのであろうか<sup>14)</sup>。

### III. 大隅源助の店の変遷

#### (1) 江戸期の大隅

それでは、江戸時代の大隅源助について見ていくこととする。

嘉永5年(1852)に出された江戸の流行物一覧『江戸五高昇薰』には商人や職人の名前が見られ、「分見道具」という項目に「アサ草力ヤ丁 大墨源」とある(図2)。当時の江戸で大隅源助が「分見道具」いわゆる測量器具を取り扱う代表的な店のひとつであったことがわかる。

信濃国小田井の測量家である小林凌雲(1796~1856)は、測量器具を江戸で購入している<sup>15)</sup>が、文政2年(1819)6月に「大墨源

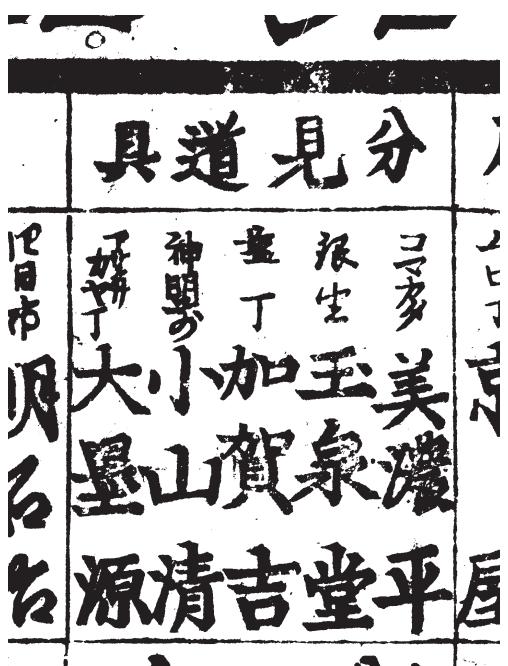


図2 『江戸五高昇薰』(分見道具)  
東京都立中央図書館加賀文庫蔵。

助」から「見盤磁石」を「銀十五匁」で、「渾發」を「銀二十五匁」で購入している。また、弘化3年(1846)4月には「見盤磁石」を「金二分と銀三匁」、「分度矩」を「銀九匁」、「半月矩」を「銀五匁」、「見盤箱」を「金二朱」でそれぞれ購入している。さらに、嘉永2年6月にも「分度」を「銀十三匁五分」で購入している。小林凌雲が大隅源助の店を長期間にわたって利用していたことがわかる。

上野国沢渡の和算家である剣持章行(1790~1871)は、慶応2年(1866)11月23日、「大隅源助」へ「羅針盤製造」<sup>16)</sup>を依頼し、「内金二分」を渡している。剣持章行は翌慶応3年4月29日に「羅針盤」を受け取りに大隅源助の店に行っているが、3月22日の類焼で「羅針盤」を失ってしまい、結局その日は受け取っていない<sup>17)</sup>。『武江年表』によると、慶応3年3月23日に浅草茅町二丁目から失火しており、日付に一日の違いはあるが3月22日の類焼とは、この火事によるものであろうか。

こうした測量家や和算家による大隅源助からの測量器具購入は、大隅が測量器具店として江戸以外の地域でも広く知られていたことを示している。

安政2年(1855)10月に起きた安政江戸地震について書かれた『安政見聞誌』<sup>18)</sup>(刊年不明)には、次のような記事がある。

淺草かや丁大すみといふ眼鏡屋に三尺有  
余の磁石を所持す、然るに彼の二日の夜  
五つ時頃とかや彼石に吸つけ置たる古釘  
古錠其外鉄物悉く落たりとなん、亭主  
ハ見るより大きに驚き我強に此石を売  
んとハ思ハねとも見世の看板或ひハ又珍  
らしく大きなる故大名衆の目にも留らハ  
幸ひならんと居へ置しも、鉄を吸ハねバ  
只の石也定めて多くの年を経たれハ自然  
其気の薄らきたる歟大きなる損毛ぞと心

よからず、更る夜の四つ時の大地震なり、其後彼石に鉄を吸すに元のごとくに付(後略)

『藤岡屋日記』の中にもほぼ同内容の記事が見られ<sup>19)</sup>、冒頭の部分が少し異なり「茅町二丁目、須原屋伊八、一軒置隣、時計屋ニ而、大隅源助と言眼鏡屋之見世ニ、三尺有余の……」で始まっており、『安政見聞誌』でいう「大すみ」とは、大隅源助について記していることがわかる。

これによると、大隅には客寄せのため三尺有余の磁石を置いていたが、安政2年10月2日の安政大地震の起る一時前に、磁石に吸いついていた古釘や古錠などの鉄製品がすべて落ちたといい、地震後には、また元のように吸いついたという。大隅が出した引札(図1)表面の左下隅には、鉄が吸いついた「磁石イシ」が描かれており、『安政見聞誌』に記される磁石とは、このようなものであろうか。

また佐渡国宿根木出身の洋学者である柴田収蔵(1820~1859)は、江戸滞在中の安政3年10月5日、浅草方面へ出向いた折、「大隅」で「筆」を購入している<sup>20)</sup>。柴田収蔵は、図の模写や地図の作成を盛んに行なっており、それが評価されこの年の12月には、幕府の洋学研究教育機関である蕃書調所の絵図調書役に任命されている<sup>21)</sup>。絵図引類を扱っている大隅源助の店で地図の作成などに使用する筆を購入したのかもしれない<sup>22)</sup>。

## (2) 明治期の大隅

明治時代に入り、当時の東京で各分野の流行の人々を集めた一枚刷り史料の中にも大隅源助の名が見られる。明治3年(1870)に出された『東京諸先生高名方独案内』<sup>23)</sup>には、300名近い著名人の名が記されているが、そのひとりに「算術 時計 浅草カヤ丁 大隅源助」とある。ここでいう「算術」には測量

も含まれていると思われる。また、明治8年の『皇国名譽君方独案内』<sup>24)</sup>には、「測量器カヤ丁二丁メ 大隅源助」とあり、明治13年の『大日本名譽大家独案(内)』<sup>25)</sup>には、「測量器時計家 浅草茅町二 大隅源助」とある。明治時代初期に出されたと考えられる『明治第七當時形勢 興廢競』<sup>26)</sup>という番付には、当時流行しているものの二番目に「測量器械」が挙げられている。これは、明治新政府によって打ち出された地租改正などの諸政策による測量の必要から測量器具の需要が高まつたことを反映するものであろう。こうした中で、明治時代になっても大隅源助が代表的な測量器具店としてよく知られていたことがわかる。

明治10年代以降、数多くの商人録が出されるようになるが、そこでは屋号の「大隅」を冠してではなく「野村源助」の名で記されることが多くなる。大隅源助は江戸時代から浅草茅町二丁目に店を構えているが、明治10年代には日本橋区通二丁目に大隅支店として野村長之助が店を出している<sup>27)</sup>。この野村長之助とは二代目源助の三男である。

明治政府は、度量衡の統一を図るため、明治8年に度量衡取締条例を公布し東京府においては、翌9年に度量衡三器の製造所および賣捌所(販売所)を定めている。その中の尺度賣捌人のひとりに「野村源助」の名が記されている<sup>28)</sup>。明治15年には大隅源助の「代替り」に伴い、「尺度賣捌御鑑札返納願」および「尺度賣捌代業願」<sup>29)</sup>が東京府へ提出されている。これによると、それまでの当主が隠居して名前を「源助」から「玉志」へと改め、文久元年生まれの息子が新たな「源助」の名前を受け継いでいることがわかる。隠居して「玉志」と名乗った者は、二代目の源助であり、文久元年生まれの息子が、三代目の源助となったわけである。「返納願」には、保証人として「浅草区御蔵前片町貳番地」に住む「野村半次郎」の名が見られるが、この

人物は二代目源助の二男である。

前述の一枚刷り史料からもわかるように、大隅は、測量器具だけでなく時計の業界でもよく知られている。当時、測量器具と時計は同じ店で取り扱われることが多かった。明治8年の『大家八人揃』<sup>30)</sup>には、東京における有力な時計商8人の名が見られ、その中に「浅草茅町二 大隅」とある。また、明治12年の『諸品商業取組評 初編』<sup>31)</sup>の中の時計商を集めた番付には、中央部分に「年寄」として「カヤ丁 大隅」となっている。さらに明治17年の『東京高名時斗商繁昌鏡』という時計商を集めた番付にも、中央部分に「年寄」として、時計商で著名な金田市兵衛と大野徳三郎に挟まるように「野村源助」の名が見られる(図3)。このように有力な時計商でもあったことがわかる。

明治16年に渋沢栄一を会頭とする東京商工会が設立され、主要団体・組合・会社の代表

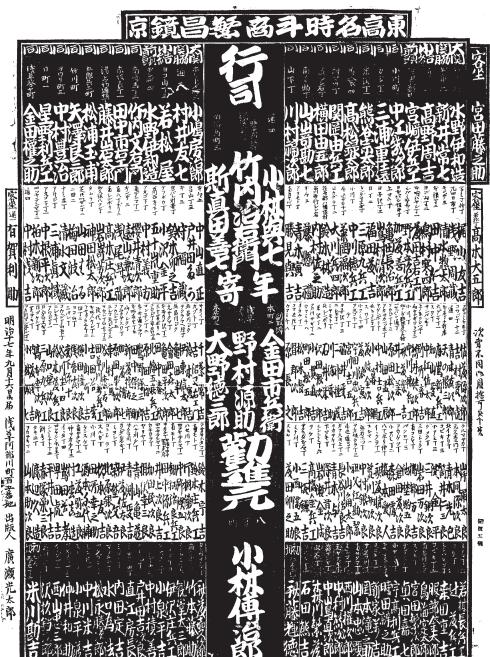


図3 『東京高名時斗商繁昌鏡』  
国立国会図書館蔵。

者を会員としたが、時計商の代表として会員になったのは、当時、時計商仲間14名の惣代を務めていた野村玉志である<sup>32)</sup>。明治15年当時、東京府内に時計屋を本業としている者が183名（兼業は22名）おり<sup>33)</sup>、時計商仲間14名とは、その中でも代表的な業者であろう。二代目源助は、隠居して玉志と名乗った後も時計業界の中で影響力のある人物であったことがわかる。

また、玉志は明治15年頃、八品商の旧第五大区一小区頭取（代表）も務めている<sup>34)</sup>。八品商とは、江戸における質屋・古着屋・古着買・古鉄屋・古鉄買・古道具屋・小道具屋・唐物屋の八種の商人のことであり、明治初期にもこの名称は用いられている。第五大区一小区とは、明治4年から11年にかけて制定されていた大区・小区のひとつであり、浅草茅町二丁目を含む周辺18町の区域を指している<sup>35)</sup>。

明治10年代の東京においては、まだ正式に認可された時計商の組合は存在しておらず、明治18年に渋沢栄一が時計商仲間取締りのため組合設立を関係方面に働きかけている<sup>36)</sup>。こうした動きの中で、明治23年に東京時計商工業組合が設立され東京府より認可を受けることになる。大隅源助も同組合に加入している<sup>37)</sup>。

大隅源助の名は、眼鏡の業界においても見ることができる。明治23年には、眼鏡商団体の始まりともいえる東京眼鏡商交際会の誕生に際し、眼鏡商として知られる岩崎宗吉や松島佐助らと共に大隅源助も発起人のひとりになつており<sup>38)</sup>、眼鏡業界においても影響力があつたことがわかる。

明治30年代に入り、明治31年に出された『時計店写真店投票番附』<sup>39)</sup>という番付によると、大隅は時計店として番付の一番下の段に記されており、時計商としては、往時の繁栄から遠のいてしまったようである。

その後、店は茅町二丁目において、大正時

代の関東大震災頃まで続いていたようである<sup>40)</sup>。昭和初期の史料には、「大隅商店」と記されている<sup>41)</sup>が、どのような商売をしていたのかはわからない。また、昭和初期、茅町二丁目の家は三階建てであったという<sup>42)</sup>。

### （3）大隅源助と大墨但馬大掾

ここで、浅草茅町二丁目に店があるために、大隅源助と同一の店として捉えられることが多い大墨但馬大掾について述べておきたい。

文政7年（1824）刊行の『江戸買物独案内』<sup>43)</sup>には、浅草茅町二丁目に店を持つ「筆墨硯問屋 大墨但馬大掾」の名が見られ、取り扱っている品物として「御眼鏡玉類」、「見盤方針」、「夜学燈」といったものが記されている。これらの品物は、大隅源助の店で取り扱っているものとよく似ている。大墨但馬大掾の店は『江戸買物独案内』に「元禄年中旧本ニアリ」と記されているように、すでに元禄年間には店があったようである。元禄3年（1690）刊行の『増補江戸惣鹿子名所大全』<sup>44)</sup>には「墨所 南大工町 大墨但馬」とあり、居所は異なるがこの商人を指しているのだろうか。また、江戸時代後期、大墨但馬大掾は十組問屋仲間の丸合組に属しており、「大墨（屋）伊兵衛」<sup>45)</sup>の名で明治初年までの十組問屋関係史料の中に出てくる。この当時のものと考えられる商標からは、筆墨硯所として江戸城本丸と西ノ丸の御用を務めていたこともわかる<sup>46)</sup>。明治10年（1877）に開催された第一回内国勧業博覧会には、「筆」、「墨」、「額面」といった文房具類を出品している<sup>47)</sup>。さらに天保から明治初年にかけての大墨但馬大掾の居所は、「政五郎地借」となっている<sup>48)</sup>が、これに対し大隅源助の居所は万延2年（1861）には「喜七地借」、慶応4年（1868）には「五人組持地借」となっており<sup>49)</sup>、両者の居所が異なっている。

こうしたことから大隅源助と大墨但馬大掾

は別の店であることがわかる。このほかにも浅草茅町二丁目には、文房具類を扱っている「大すみ三十郎」<sup>50)</sup>という店もある。浅草茅町二丁目において、同じ屋号を持ち、同じような品物も扱う店が三店あったことがわかるが、三店の間の関係については不明である。

#### IV. 不動産所有から見える大隅

それでは、大隅源助が江戸・東京地域に所有する不動産について見ていただきたい。これから取り上げる事例は、大隅が所有していた不動産すべてに及んでいるものではなく、管見の範囲で確認できたものである。

江戸時代における大隅の町屋敷所有を浅草新鳥越町一・二丁目に見ることができる。浅草新鳥越町は、奥州街道（日光街道）沿いに南から北へ一丁目から四丁目と続く両側町であり、浅草寺にも程近い。新鳥越町一・二丁目の町屋敷所持者の変遷を記録した『沽券扣』<sup>51)</sup>には、寛保元年（1741）から明治6年（1873）までの記載がある。この中には、4か所の町屋敷所持者として「浅草茅町二丁目」の「源助」という者が記されている。「源助」という名前の下には黒印が押されており、4か所とも同じ印である。これらの印は、明治15年の「尺度賣捌御鑑札返納願」<sup>52)</sup>に押されている野村玉志（二代目源助）の黒印と同じ

である。また『沽券扣』には「源助」の年齢が、文久3年（1863）当時に「四十才」となつておらず、二代目源助と一致している。これらのことから、『沽券扣』の「源助」とは、二代目の大隅源助であることがわかる。

大隅が浅草新鳥越町一・二丁目に所持していた町屋敷は表1のとおりである。

これによると、大隅は、新鳥越町一丁目において2か所の町屋敷を万延2年（1861）に金600両と金250両で購入している。さらに、新鳥越町二丁目において隣接する2か所の町屋敷を文久3年に金300両で、慶応4年（1868）に金200両で購入している。幕末の7年余りの間に合計1350両の資金を投入して町屋敷を購入していることがわかる。これらの町屋敷はいずれも街道沿いの土地、あるいは角地である。

また、大隅の居所は浅草茅町二丁目において「喜七地借」、「五人組持地借」となっていることから、当時は自家の土地を所有しておらず、土地を借りて店の営業をしていたことがわかる。

次に明治時代の不動産所有について見てみたい。明治期については、江戸期よりも事例を多く挙げることができ表2のようになる。

これによると、大隅は、江戸時代から店を構えていた浅草茅町二丁目に土地を購入して

表1 江戸末期の不動産所有

番号	購入年月日	場所、( )内は明治3~11年頃の町名・地番	面積、( )内は坪数	購入額	購入者の居所と名前ほか
1	万延2年(1861) 2月2日	浅草新鳥越町一丁目東側 (浅草吉野町九十六番地)	5畝29歩8厘 (179.8)	600両	浅草茅町二丁目 喜七地借 地主 源助
2	万延2年(1861) 2月2日	浅草新鳥越町一丁目東側 (浅草吉野町九十四番地)	2畝2歩 (62)	250両	浅草茅町二丁目 喜七地借 地主 源助
3	文久3年(1863) 6月16日	浅草新鳥越町二丁目西側 (浅草吉野町十九番地)	3畝2歩 (92)	300両	浅草茅町二丁目 地主 源助 亥四十才
4	慶応4年(1868) 閏4月21日	浅草新鳥越町二丁目西側 (浅草吉野町十八番地)	2畝20歩5厘 (80.5)	200両	浅草茅町二丁目 五人組持地借 地主 源助

注1)『沽券扣』（東京都立中央図書館蔵）、『台東区文化財調査報告書第三十八集 沽券扣』により作成。

2) 4の不動産については、慶応4年7月21日に金200両にて売却される。

表2 明治初期の不動産所有

番号	購入時期	場所	明治11年改正後の地番	面積	購入額
5	明治6年～11年 (1873)～(1878)	浅草茅町二丁目二十番地	六	92坪	不明
6	明治6年～11年	浅草御蔵前片町二番地	二	160坪	不明
7	明治6年～11年	浅草御蔵前片町三番地	二	155坪	不明
8	明治9年～11年	日本橋通二丁目一番地	一	127坪	不明
9	明治6年～9年	日本橋瀬戸戸物町二十三番地	十	234坪	不明
10	明治9年～11年	日本橋元柳町三十二番地	四十	89坪6合5勺	不明
11	明治11年5月	銀座二丁目六番地 (銀座煉瓦街・家屋のみ)	六	15坪8合3勺5才 (建坪)	1140円93銭3厘

注1) 次の史料により作成。『東京地主細覧』(明治6年),『地主名鑑』(明治9年),『東京地主案内』(明治11年),『東京区分番地改正便覧』(明治11年)以上,国立国会図書館蔵。『東京六区沽券地図』(明治6年),『一等二等煉瓦化家屋払下願 一九号 明治十一年度分』(明治11年),『稟議録 市街地理(第一号)』(明治12年),『分割地券書換願』(明治14年)以上,東京都公文書館蔵。

2) 5～9までの面積は『東京地主案内』(明治11年)による。

3) 10の不動産は明治11年11月から12月にかけて,駅通局に郵便局用地として買い上げられ引き渡されている。その際,代価として地主の野村源助には金1000円が支払われ,7名の地借人にもほぼ同額が支払われた模様である。

4)『東京地主案内』には,浅草諏訪町に「野村トキ」(二代目源助の妻と同姓同名)名義の土地があるが,同書には所有者の居所が記されておらず,他の史料によって大隅の土地であると確認できないので表には掲げていない。

いることがわかる。茅町二丁目は,神田川に架かる浅草橋の北に位置し,奥州街道沿いに広がる両側町である。大隅は購入した茅町二丁目二十番地(明治11年の地番改正後は,六番地)において,明治以降,店の営業を続けていたことがわかっている。なお当地が江戸時代の居所である「喜七地借」,「五人組持地借」と同じ場所かは不明である。茅町二丁目を少し北に行った御蔵前片町二番地,三番地の隣接する土地も所有している。大隅が所有している御蔵前片町の土地は,奥州街道沿いにあり,しかも二番地が角地になる。

また,日本橋地域にも土地を所有している。日本橋通二丁目一番地の土地は,東海道沿いの角地である。通二丁目は,五街道の起点である日本橋から東海道沿いに南へ続く通一丁目から四丁目の地域にあり,江戸時代から白木屋などの大店が軒を連ね,地価も非常に高い。明治6年当時の地価を比較してみると<sup>53)</sup>,通二丁目一番地は茅町二丁目二十番地



図4 大隅の所有する不動産分布図

本図は「明治東京全図」(明治9年)をもとに作成。

・は不動産の位置を示し,併記される番号は表1・2に対応。

の二倍以上地価が高い。このほか瀬戸物町二十三番地の土地は、日本橋魚河岸と室町の繁華街に程近い。元柳町三十二番地の土地は、浅草橋を渡る手前の浅草御門の際にあり、街路に面している。

さらに、家屋を購入した事例を銀座煉瓦街に見ることができる。明治5年の銀座大火をきっかけにして、銀座に西洋風の煉瓦街が建設された。煉瓦街は一等から三等までの家屋があり、一等は表通りに面し立地条件がいい<sup>54)</sup>。明治11年に大隅が銀座二丁目六番地に購入した物件は、建坪16坪に満たない広さではあるが一等煉瓦家屋で、購入額は1140円ほど掛かっている。

こうした明治期における不動産所有の事例は、いずれも明治6年から11年までの間に大隅の所有になっている。

ここまで見てきた万延2年から明治11年までに大隅が所有した土地・家屋は、日本橋を起点にした奥州街道と東海道の両街道沿いに広がっている。奥州街道沿いには、街道を少し入った瀬戸物町、街道沿いに元柳町、茅町二丁目、御蔵前片町そして新鳥越町一・二丁目へと続き、東海道沿いには、通二丁目、銀座二丁目と続いている。これらの町に所有する土地・家屋は、2か所を除いて街道に面しており、一本の主要街路を通してひとつに繋がっている。このことから、土地・家屋の購入場所を選んでいると考えられる。

また、大隅が所有する土地・家屋は、主要街路沿い、角地、中心市街地にあつたりするため、多くの人が集まり、商売をする上で非常に適した場所であり、資産価値も高い。こうした不動産は、自家の居住・店舗やその関連施設としての利用を除き、不動産経営を行なっていたと考えられる。

このような不動産所有の事例から、大隅がこの時期に不動産を所有するだけの資金を調達できる経営状況であったといえる。それは、店の変遷の中でも述べたように、大隅の

名が当時世間によく知られており、業界の中でも中心的な存在であったことから、店が最も繁盛していた時期と考えられる。またそれは、二代目源助の代であったといえる。

## V. 大隅による測量器具製造販売

### (1) 大隅と市川方静

大隅源助の測量器具製造販売の実例を市川方静という人物との関係の中で見ていきたい。

市川方静は、名は運八郎、字は方静といい、天保5年(1834)に陸奥国白河に生まれた白河藩士であり、和算・測量を学んだ。維新後、白河県の史生に任せられ、さらに明治7年(1874)、福島師範学校の算術教授となるがまもなく辞任した。明治20年には、わが国で初めて外国人を含む専門学者によって白河で行なわれた皆既日蝕の観測に参加している。市川は諸学諸芸に秀でており、私塾を開き多くの門下生を育成した。明治36年、70歳で没した<sup>55)</sup>。

市川が力を注いでいたことのひとつに、測量器具の考案がある。安政6年(1859)に市川は「調方儀」という測量器具を考案し、白河の大工である木村政蔵に製造させている<sup>56)</sup>。「調方儀」は、どの地域でも製造できるようにと考えられた木製の測量器具であり、市川の門人である松澤信義が文久2年(1862)に著し、市川自身の閲にもなる『算法量地捷解前編』<sup>57)</sup>の中に図示されている。また、同書の刊記部分には、「測器師 大隅源助」と記されており、大隅と市川との間に繋がりがあったことがわかる。なお「調方儀」は、明治5年に山形県二口越山路開鑿で使用されている。

明治時代に入ると、市川は、明治7年頃「市川儀」という測量器具を考案し、その製造を大隅源助に依頼している<sup>58)</sup>。「市川儀」を実際に製造したのは、田島町に住む山盛新吉という大隅の傭工で腕のよい職人であった

らしい。明治10年に開催された第一回内国勧業博覧会に大隅は「大方儀」、「高低平儀」といった測量器具を出品している<sup>59)</sup>が、その製造人も山盛新吉であり、出来映えが評価され「褒状」を受けている<sup>60)</sup>。「市川儀」は、「大中小ノ三方儀及ヒ調方儀ヲ兼備スルモノニシテ遠近ノ距離方向等假令高低アリト雖モ下振ヲ用井スシテ其眞數ヲ測量シ得ル至簡至易ノモノナリ」という測量器具であり、明治7年5月、東京第十一区三小区深川平井新田の佐賀県士族園田忠苗邸において実地試験が行なわれ「毫厘ノ差ナキヲ証ス」と、その正確さを証明している。「市川儀」は大隅が出した引札にも描かれており(図5)、実際に販売していたことがわかる。また、「市川儀」は「其製極メテ堅牢」となっており、描かれた図からも真鍮などで作られた金属製と考えられる。

明治13年4月、市川は、市川儀を改作し、その製造を大隅に依頼している<sup>61)</sup>。改作された市川儀は「其製ハ眞鍮<sup>しんちゅう</sup>製にして半方中に半圓を備ヘ又其の盤中に磁石并に水平盤あり其の方圓合作の度數至て細微にて顯微鏡<sup>むしめがね</sup>を以て之れを檢す盤上の望遠鏡ハ運轉自在にして盤面を動かすを要せず又方位を見るに於てハ半圓にして二萬一千六百零々々分の方位を知る」測量器具であり、同年、南葛飾郡寺島村字前沼において実地試験が行なわれ、見学者はその精密さを嘆賞したという<sup>62)</sup>。明治15年にも市川儀を改作した模様であり<sup>63)</sup>、大隅の出した新聞広告によると<sup>64)</sup>、「洋器の「テヲトライト」及我大中小の三方儀及び調方儀を兼備し量るに水平盤の用を藉らず縱令險嶺峻坂なるも乘除一次して以て之れが斜線を得可く又其高低水平距離方向等を求むるにハ儀器盤面の位置を變化すれば則容易に其眞形と眞數とを得べし實に簡便にして且功益無比の器械」という測量器具であり、「上等製金百十円、下等製金三十五円」で販売されている。

この改作された市川儀と考えられるものが

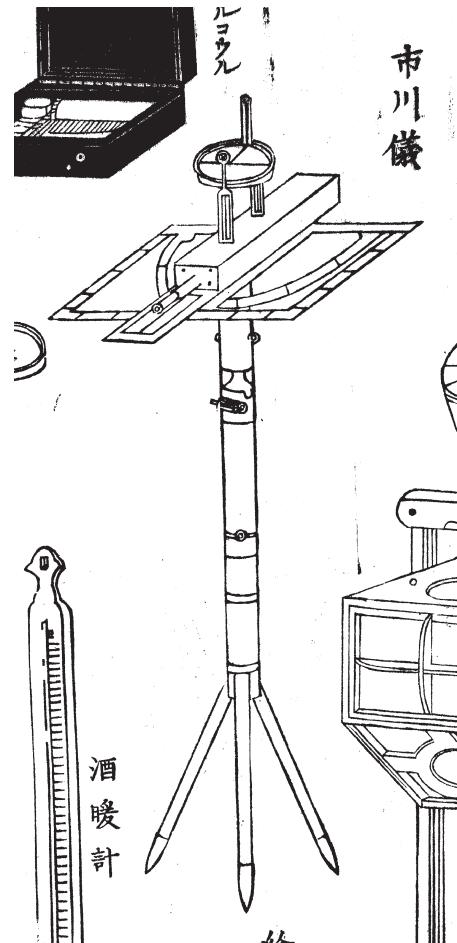


図5 市川儀(大隅源助の引札より)  
個人蔵。『日新真事誌』(明治7年5月27日)にも図示されている。

日本学士院に2点所蔵されている。ひとつは(図6)、箱を伴い、箱の貼り紙には、「市川方静考案 測量器 銘市川儀 大隅源助工」と記されている。また、市川儀の本体には、「市川儀 大隅製」と刻まれている。もうひとつも(図7)、箱を伴い、箱蓋の表には「方静先生發明 乙第一号 市川儀 菊池」、裏には「此器市川方静先生發明大隅源助製造之明治十六年五月」と記されている。

明治19年、市川は「方静儀」を考案し、これも大隅に製造させている<sup>65)</sup>。製造された



図6 (改作) 市川儀  
日本学士院蔵。

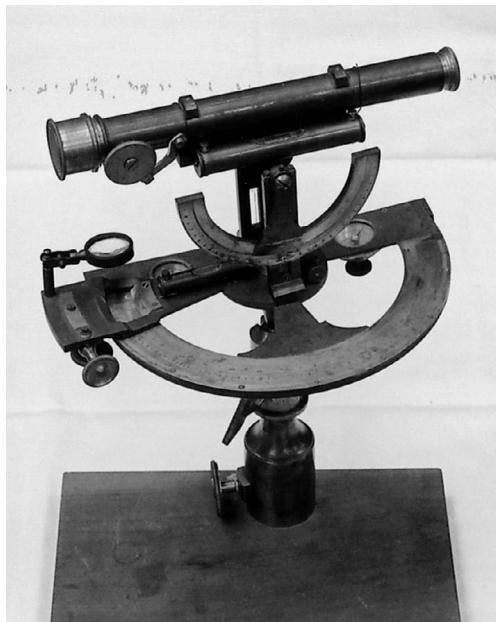


図7 (改作) 市川儀  
日本学士院蔵。

「方静儀」は、「羅針に器械盤面南北の一線を合せ固停而して遊表捻にて進退し其の度を合す至て簡明にして了解しやすき器械なり」と

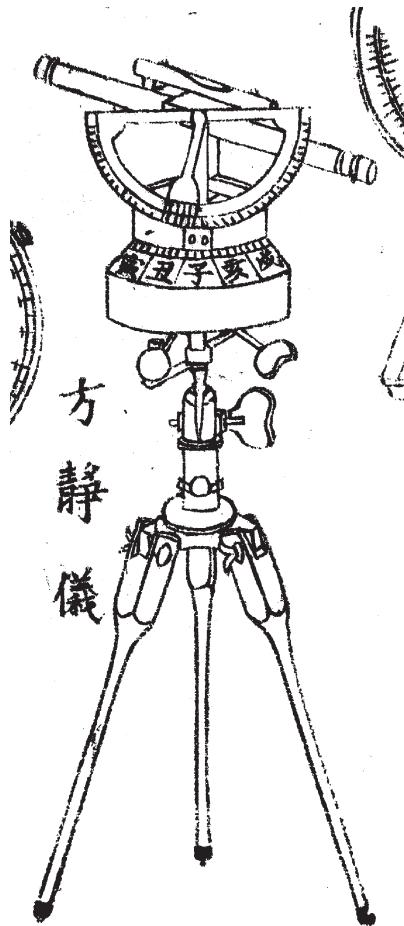


図8 方静儀 (大隅源助の引札より)  
埼玉県立文書館蔵, 高橋 (周) 家・No.2800。  
方静儀の図面が日本学士院に残されている。

いう測量器具であり、同年5月に東京本所横綱町池田侯邸において実地試験され、見学者もその正確さに驚いたという。大隅は「方静儀」の新聞広告を出し<sup>66)</sup>、引札に図示する(図8)などして販売を手掛けている。

ここまで見てきたように、市川が考案・改作した測量器具は、大隅に製造が依頼され、販売されていたことがわかる。また製造された測量器具は、聴衆の面前で実地試験が行なわれており、それは、実際にその精度の高さを見せることによって、宣伝効果をねらっていることがわかる。さらに、測量器具を販売

するにおいては、新聞に広告を掲載し、店の引札に図示するなど積極的に宣伝している。

また、測量器具を市川が考案・改作し、大隅が製造したという事例は、いずれも『日新真事誌』、『朝野新聞』、『郵便報知新聞』という新聞紙上に掲載された記事である。こうした記事の情報は、新聞社側が独自に得ただけでなく、市川、大隅側からもたらされたものもあったのではないだろうか。

このように大隅は、江戸時代には書籍や引札を利用し、明治時代には新聞記事、新聞廣告、引札などをを利用して測量器具の製造販売を手掛けていることがわかる。それは、新聞・出版・廣告という媒体を巧みに利用しているといえる。

## (2) 大隅の測量器具製造

最後に、大隅による測量器具の製造について触れておきたい。

大隅は二代目源助以降、江戸時代の文久年間には、「測器師」、明治時代には「測器舗」、「器機製造師」、「器械師」、「測量器製造販捌所」などと称されている<sup>67)</sup>。それでは、「測器工」、「測器師」と称し測量器具製造者として著名な大野弥三郎規行・規周の親子と同じように大隅の代々の当主自身も、測量器具を製造していたのであろうか。

大隅の祖先である初代源左衛門が大工職人であったことから、その後の当主もこうした技術を持っていた可能性は否定できない。たとえば、市川が安政6年(1859)に考案した「調方儀」という測量器具は木製であり、これを最初に製造したのが大工職人であったようだ。大隅の当主も祖先の大工技術を受け継ぎ、測量器具製造にその技術が活かされていたかもしれない。

しかしながら、二代目源助以降の状況を見ると、明治7年(1874)の「市川儀」や明治10年の内国勧業博覧会に出品した測量器具は真鍮などを使用した金属製と考えられ、それを

実際に製造したのは田島町<sup>68)</sup>に住む「傭工」の山盛新吉であり、大隅が工人を外部に雇っていたことがわかる。また、江戸時代後期から明治時代にかけて出された引札から、店では、測量器具だけでなく時計・眼鏡・ガラス製品など多種多様な商品を扱っていることが読み取れる。さらに大隅の足跡からは、明治時代初期に各業界の中で中心的な役割を担っていることもわかる。こうしたことから、とりわけ二代目源助以降の当主については商人的な側面が強いと考えられる。

それでは、大隅は自店に職人を置き製造を行なっていたのであろうか。ここにひとつの例がある。明治時代の代表的な測量器具店である玉屋号を持つ宮田藤左衛門の店では、明治初年当時、測量器具を、専属または共用の下職(下請けの職人)に作らせて、それに店名を入れて販売していたという<sup>69)</sup>。製品には、実際に作った職人の名前などを入れずに、店の製品として販売していたようである。さらに興味深いことには、共用の職人がいたということである。つまり、ひとつの店だけに製品を納めるのではなく、複数の店に製品を納める職人がいたということであり、一職人が作った同じ製品をそれぞれの店の独自の製品として販売していたこともあったであろう。宮田藤左衛門の店で直営の工場を持つようになったのは、明治37年のことであるという<sup>70)</sup>。

こうしたことから、大隅においても外部の職人を使い、宮田藤左衛門の店のように下請けの職人が製造したものを店の名前を入れて販売していたことが充分に考えられる。

しかし、大隅の当主や自店による測量器具製造が全く行なわれなかつたかどうかは今後の検討課題である。

## VI. おわりに

大隅源助の店の経営状況などを具体的に示すようなまとめた文書史料は、現在確認さ

れていないが、本稿では、各所に残されている大隅の足跡をひとつひとつたどることによって、大隅がどのような店であったのかを検証してきた。そこで明らかになった点は、江戸時代後期から明治時代にかけて、測量器具を取り扱う代表的な店であり、業界の中で中心的な存在であったということである。また、店の繁盛振りを示すものとして、維新前後の不動産取得が挙げられる。さらに、市川方静との関わりの中で測量器具を製造販売し、その中で新聞・出版・広告という媒体を効果的に利用していたことがわかる。

それでは、大隅源助は測量器具を通して当時の社会にどのような影響を与えていたのであろうか。

大隅が江戸に店を構え活況を呈するに至った時期には、測量史や地図史の上で、次のような社会情勢が見られる<sup>71)</sup>。寛政期から文政期にかけての伊能忠敬らによる全国測量と日本全図作成は、各地の測量家を刺激し彼らの活動をより活発なものにしていると推測される。文化・文政期から天保期にかけては、諸藩が財政再建のための藩政改革を行なう中で基礎資料としての領内絵図が組織的に作成され、天保期には、幕府によって全国一斉に郷帳と国絵図の改訂が行なわれている。また、外国船渡来への対応から海防が急務となり、軍事的な理由から測量術への関心が高まる。そして、明治初年には、地租改正によって全国的に土地測量が行なわれ地図が作成されることになる。

こうした社会情勢は、測量や地図作成を盛んなものとし、そこで使用される測量器具の需要も増すことになり、その製造者や販売者の増加に繋がったであろう。大隅源助は正にこのような時期に登場し、店を繁盛させている。それはまた、大隅が測量器具を通して、幕府・諸藩や明治政府が打ち出した諸政策の推進を支えていたといえるであろうし、体制の基盤づくりにひとつの貢献をしていたとも

いえるのではないだろうか。

本稿の冒頭に掲げたように、大隅は商品が図示された引札を出しているが、その種類は相当数残されており、これについては別稿にて検証してみたい。

#### 〔付記〕

本稿をまとめにあたり、野村家の野村千春氏、野村孝子氏、野村一也氏、光照院の吉水裕光氏、吉水岳彦氏には、貴重な史料を閲覧させていただくとともに、ご教示とご協力をいただきました。ならびに国文学研究資料館、国立国会図書館、国立天文台、国立歴史民俗博物館、埼玉県立文書館、東京都公文書館、東京都立中央図書館、東洋文庫、日本学士院の各機関に史料を閲覧させていただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

#### 〔注〕

- 1) 大谷亮吉『伊能忠敬』、岩波書店、1917、44～46・766頁。
- 2) ①片山三平「わが国における測量器械類製造業者の変遷一」、測量4-11、1954、23頁。  
②片山三平『測量機の発展史』、富士測量機製造株式会社、1969、12～15頁。
- 3) ①松崎利雄『江戸時代の測量術』、総合科学出版、1979、200～202頁。②佐藤甚次郎『明治期作成の地籍図』、古今書院、1986、218～220頁。
- 4) 山口隆二「日本時計産業史覚書」、国際時計通信7-9、1966、258～264頁。大久保利謙緒著『続幕末和蘭留学関係史料集成』、雄松堂出版、1984、761～766頁。宮永孝「幕末オランダ留学生一職方・大野弥三郎」、社会労働研究31-3・4、1985、37～65頁。宮永孝『幕末オランダ留学生の研究』、日本経済評論社、1990、709～730頁。
- 5) 前掲3) ①口絵12・13、②220頁。
- 6) 拙稿『江戸・東京における無尽灯一引札や『重宝 無盡燈用法記』を中心として—』、私家版、2003。
- 7) 光照院・吉水岳彦氏のご教示による。
- 8) 光照院には編年体の過去帳、野村家には月

- 別にまとめられた過去帳（写）が残されている。
- 9) 職人名としての可能性もある。
- 10) 野村千春氏のご教示。古林亀治郎編『現代人名辞典』、中央通信社、1912。東京府農商課『稟申録 上』、1888、十九、東京都公文書館蔵などによる。
- 11) 光照院の過去帳に記されている「大工 源左衛門」の記述は2か所あり、ともに「大工」部分が抹消されている。また、「大墨源助」の記述においても、「大墨」部分を抹消し「野村」に変更している。これらの抹消・変更は、後世の筆によるものと考えられる。したがって、初代源左衛門の職は大工であったと判断した。
- 12) 内国勧業博覧会事務局『明治十年内国勧業博覧会出品解説』、1878、第二区第十六類51頁、国立国会図書館蔵。
- 13) 東京都台東区教育委員会社会教育・体育課編『台東区文化財調査報告書第十二集（基礎資料編VI）浄土宗明細簿（旧浅草区Ⅱ・旧下谷区）明治十年』、台東区教育委員会、1992、25~26頁。
- 14) また、伊勢湾を挟んで、四日市の対岸（知多半島）にも「大野」という地がある。
- 15) 拙稿「家相見・測量家としての小林凌雲一「観相宝来記」を中心としてー」、信濃60-12、2008、959~965頁。
- 16) 剣持章行が著した嘉永6年（1853）刊の『量地円起方成』には、「羅針盤」が図示されており、小方儀と同じ構造をしている。
- 17) 「剣持豫山日誌」、千葉県図書館協会報5~11・13、1929~1933。高橋大人『和算家豫山剣持章行 遊歴の跡を訪ねて』、私家版、2004。
- 18) 『安政見聞誌』、刊年不明、東洋文庫蔵。大隅の記事については、榎本祐嗣「『安政見聞誌』に所載の“地震時斗”」、歴史地震15、1999、201~208頁の中で紹介されている。
- 19) 鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 第十五卷』、三一書房、1995、556頁。また、シーボルト再来日時の1861年9月28日の日記にも同様な記事がある（石山禎一・牧幸一訳『シーボルト日記一再来日時の幕末見聞記』、八坂書房、2005、246~249頁）。ただし、シーボルトは「覚書」の中で、地震発生日時を1854年12月23日（嘉永7年11月4日）としている。
- 20) 田中圭一編『柴田収蔵日記』2、平凡社、1996、303頁。
- 21) 田中圭一編『柴田収蔵日記』1、平凡社、1996、13~34頁ほか。
- 22) 後述するように、茅町二丁目には、「おおすみ」の屋号を持つ店が他にも存在し、そこでの購入もありえる。
- 23) 英蘭斎五翁『東京諸先生高名方独案内』、1870、個人蔵。
- 24) 東花堂五翁『皇国名譽君方独案内』、1875、東京都立中央図書館蔵。
- 25) 宮田宇兵衛（東花堂）『大日本名誉大家独案（内）』、1880、国立国会図書館蔵。
- 26) 『明治第七當時形勢 興廢競』、刊年不明、国文学研究資料館蔵。
- 27) 野田幸内『東京諸商業繁栄録』、1883、国立国会図書館蔵。上原東一郎『東京買物独案内』、1890、国立国会図書館蔵。
- 28) 東京都編『東京市史稿』市街篇第五十八、東京都、1966、499~502頁。
- 29) 東京府勧業課『回議録 第九類 度量衡』、1882、四十九、東京都公文書館蔵。
- 30) 東花堂『大家八人揃』、1875、早稲田大学演劇博物館蔵。
- 31) 尾崎富五郎『諸品商業取組評 初編』、1879、国立国会図書館蔵。
- 32) 東京都編『東京市史稿』市街篇第六十七、東京都、1975、639~654頁。東京府勧業課『回議録 東京商工会』、1883、十八、東京都公文書館蔵。
- 33) 東京府勧業課『回議録 第二十類 官庁往復・3』、1882、八十四、東京都公文書館蔵。
- 34) 前掲33)。
- 35) 東京都編『東京市史稿』市街篇第五十六、東京都、1965、144頁。
- 36) 明治ニュース事典編纂委員会・毎日コミュニケーションズ出版部編『明治ニュース事典 第三卷』、毎日コミュニケーションズ、1984、572頁。

- 37) 東京都編『東京市史稿』市街篇第八十, 東京都, 1989, 469~479頁。大隅では、四代目の源助が幼少であったため、後見人の野村長之助の名で組合に加入している。
- 38) 鈴木定吉『東京眼鏡同業組合沿革史』, 伊勢定眼鏡店, 1939, 1~4頁。
- 39) 福重健馬『時計店写真店投票番附』, 1898 (林英夫・芳賀登編『江戸明治庶民史料集成・番付集成』(下), 柏書房, 1973, 99頁に所載)。
- 40) 野村千春氏のご教示による。
- 41) 『日本紳士録』32版, 交詢社, 1928。
- 42) 野村千春氏のご教示による。
- 43) 中川五郎左衛門『江戸買物独案内』, 文政7年 (1824), 国立国会図書館蔵。
- 44) 『増補江戸惣鹿子名所大全』巻の六, 元禄3年 (1690) (江戸叢書刊行会編『江戸叢書』第四卷, 日本図書センター, 1980, 81~131頁に所載)。
- 45) 文政7年 (1824) 刊の『江戸買物独案内』に見られる大墨但馬大掾の店印は、嘉永6年 (1853) に出された『大江戸能簾鏡』や『十組仲間丸合組積合』に見られる茅町二丁目に店を持つ大墨伊兵衛の店印と一致しており、両者は同じ店であると考えられる。
- 46) 『懐溜諸脣』, H-1492-3-76, 国立歴史民俗博物館蔵。
- 47) 内国勧業博覧会事務局『明治十年内国勧業博覧会出品目録』, 1877, 追加東二ノ三・追加東三ノ二, 国立国会図書館蔵。
- 48) 「菱垣廻船一方積取締申合規定連印帳」, 天保5年 (1834) (日本海事史学会編『海事史料叢書』第二卷, 成山堂書店, 1969, 303~356頁に所載)。『諸問屋名前帳』, 四十九, 国立国会図書館蔵。『東京市中各種問屋組合仲買人書上帳』, 1869, 早稻田大学図書館蔵。
- 49) 柳川兵蔵『沽券扣』, 寛保元年 (1741) ~明治6年 (1873), 東京都立中央図書館蔵。台東区教育委員会生涯学習課編『台東区文化財調査報告書第三十八集 沽券扣』台東区教育委員会, 2007。
- 50) 前掲46) H-1492-8-118。
- 51) 前掲49)。
- 52) 前掲29)。
- 53) 『明治六大区沽券地図』, 1873, 東京都公文書館蔵。同書に記される沽券金高による。
- 54) 野口孝一『銀座物語一煉瓦街を探訪する』, 中央公論社, 1997, 28~71頁。
- 55) 白河市編『白河市史』第十巻, 白河市, 1992, 488~491・510~511頁。
- 56) 一新社『日新真事誌』, 1874年2月3日, 国立国会図書館蔵。日本学士院には、木村が製造した調方儀の一部が所蔵されている。
- 57) 市川方静閑・松沢信義編『算法量地捷解前編』, 文久2年 (1862), 国立国会図書館蔵。同書は、嘉永5年 (1852) 刊の『量地図説』に倣ったものであり、同書中の「調方儀」とほぼ同様な構造を持つ測量器具が、『量地図説』では「全方儀」として図示されている。
- 58) 前掲56) 1874年5月27日。
- 59) 前掲12)。
- 60) 内国勧業博覧会事務局『明治十年内国勧業博覧会審査評語』, 1877, 470頁, 国立国会図書館蔵。この博覧会では優れた出品物に對し、龍紋(一等)・鳳紋(二等)・花紋(三等)・褒状(等外)の四賞が授与された。
- 61) 朝野新聞社『朝野新聞』, 1880年9月21日, 国立国会図書館蔵。
- 62) 前掲61) 1880年12月25日。
- 63) 報知社『郵便報知新聞』1886年6月15日, 国立国会図書館蔵。同紙によると、市川方静は安政6年 (1859) から明治15年 (1882) までに「測量器を発明改作する事、前後四回」に及んでいるという。
- 64) 前掲61) 1882年6月24日。
- 65) 前掲63)。
- 66) 前掲61) 1886年5月28日。
- 67) 前掲57)・58)・61)・64)。三益社『有喜世新聞』, 1880年12月12日。
- 68) 田島町には、他にも山盛姓を持つ測量器具製造者として、山盛春榮、山盛咲次郎、山盛春吉の名が確認できる。山盛春榮は、明治10年 (1877) の第一回内国勧業博覧会に戸井田吉次郎が出品した測量器具の製造人である。山盛咲次郎は、明治14年の第二回内国勧業博覧会に宮田藤左衛門が出品した測

- 量器具の製造人であり、宮田と山盛咲次郎は有功賞を受けている。また、山盛春吉は、明治13年の『大日本名誉大家独案(内)』にその名が記されている。
- 69) 前掲2) ①。
- 70) 片山三平「わが国における測量器械類製造業者の変遷二」、測量4-12、1954、19頁。
- 71) 前掲3) ①20~22頁。川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』、古今書院、1984、245~279頁。川村博忠『近世絵図と測量術』、古今書院、1992、55~65頁。藤田覚「19世紀前半の日本—国民国家形成の前提」(朝尾直弘ほか編『日本通史』第15巻、岩波書店、1995)、3~67頁。